

ピリピ人への手紙

ピリピの教会はパウロが東ヨーロッパで最初に作った教会で
それについては使徒の働き 16 章に記されています
ピリピは古代マケドニア王国にあったローマの植民地です
退役軍人がたくさんいて愛国主義者の多いことで知られていました
そのためパウロが
世界の真の王はイエスであると宣べ伝えた時は反発されました
イエスを信じるピリピ人はパウロが去ったあとも
このような反発や迫害を受け続けていたのです
しかし彼らは活気のある教会であり続けイエスの教えに忠実でした
何度も投獄されていたパウロはこの手紙も獄中から
ある目的をもって書いていたのです
ピリピの教会は牢獄にいるパウロのために
信徒の一人であるエパフロディトに支援金を届けさせていました
パウロはそのお礼とほかの用件を伝える手紙を託し
エパフロディトを帰しました
この手紙の構成はパウロのほかの手紙と違い
最初から最後まで一つのテーマについて
掘り下げるものではありません
むしろ意味深い短文をいくつも連ねています
そしてこの手紙の中心にあってそれらを束ねているのが 2 章にある詩です
それはメシアの受肉生涯死よみがえり昇天を見事に再現した詩です
パウロはたくさんの短文の中でこの詩のキーワードやテーマをとりあげ
クリスチャンとして生きることは自分の物語を
イエスの物語の再現と見なすことなのだを教えています
パウロは手紙の冒頭で
ピリピ人の惜しめない愛情と誠実さに対する感謝の祈りを記しています
そして彼らの生き方を変えている神のみわざはこれからも続いていき
さらに美しい誠実さと愛となって表れると言い切るのです
それから彼らが心配している自分の状態
つまり獄中にある現状について語り始めました
ローマによって投獄されていることは決して楽なことではありません
しかし皮肉にもこれが
イエスについての良い知らせを伝えるうえでは利点となったのです
ローマの親衛隊はみなパウロが
イエスをよみがりの主として宣べ伝えたために捕らえられたことを知っていました
そしてパウロが投獄されると他のクリスチャンたちは
イエスのことをもっと伝えるべきだと確信したのです
パウロは自分が釈放されるだろうと楽観していましたが
処刑される可能性もありました
しかしそれを重々承知でパウロはそれも悪くないと結論付けていました
彼にとっては生きることはメシア死ぬことは益だからです
パウロにとっては今の命も未来の命も
イエスの命と愛によって意味あるものとなるのです
もし処刑されてもイエスと同じところにいられるので
パウロにとっては幸いなことです
もし釈放されるならイエスの教会を建てる働きを続けられるので

他の人にとって幸いなことでパウロはそれも望みました
これらの言葉を通してパウロの思考パターンがわかります
パウロにとっての犠牲とはイエスのために死ぬことではなく
むしろ他の人に仕えるために生き残ることでした
自分より人を愛するために犠牲を払うこと
これがパウロにとってイエスの物語を生きることだったのです
パウロはピリピ人にも同じ心構えでイエスに倣うように強く勧めました
メシアの福音にふさわしく生活するようにとパウロは言います
ピリピのクリスチャンたちは
ローマの愛国者たちの巣窟で暮らしていました
しかし彼らの生き方は別の王によって形作られていました
イエスですそのために迫害を受けるかもしれません
それでも彼らは恐れませんでした
イエスのために苦しみを受けることは
自分たちもイエスの物語を生きることだったからです
そしていよいよ2章のあの詩につながります
この詩は旧約聖書特に創世記1章から3章の
アダムとその反逆のストーリー
そしてイザヤ書の苦難のしもべの詩を色濃く反映しています
福音を見事に濃縮していて深く心に留めておくに価する詩です
人として来られる前メシアは栄光をまとい神と対等の存在でした
そして神と対等になろうとしたアダムとは反対に
メシアはその立場を自分のために使わず
かえってそれを捨てて人になったのです
すべての人に仕える者となりそれだけでなくご自分を低くされました
父なる神に従順に従いローマの処刑法によって殺されたのです
しかし神の力と恵みによってメシアの屈辱的な死は
よみがえりという逆転を迎えたのです
そして神はイエスを全世界の王とし
すべての名に勝る名を与えました
それはすべての人がイエスがメシアであると知り
父なる神に栄光を帰するためです
最後の言葉はイザヤ書45章からの引用で驚くべきものです
この箇所では
全被造物がイスラエルの神は主であることを悟ります
パウロはここではっきりとイエスの十字架とよみがえりを通して
イスラエルの唯一のまことの神とは
父なる神と主なるイエスのことだとわかると言っているのです
このようにこの詩はイエスとはどういう方かについてのパウロの確信を表現し
更にイエスに従う者が倣うべきイエスの生き方を示しています
そのためパウロはこのすぐあとで
テモテとエパフロデイトの二人について記しています
2人はどちらもイエスの物語を生きた人だったからです
テモテはいつも自分のことより他の人の益になることを
考えていたという点でイエスに似ています
支援金を届けるために派遣されたエパフロデイトは
危険を冒しても牢獄にいるパウロに仕えることを選びました

彼は瀕死の重病にかかりながらもパウロに仕えたのです
しかし神は彼とパウロをあわれんで
パウロが彼を失わずにすむようにしました
パウロがここで言おうとしているのは
この二人はイエスの物語を生きる人の良い例であり
手本にするべきだということです
それからパウロは自分自身の話を例に挙げます
ガラテヤ人への手紙に出てくる非ユダヤ人のクリスチャンに
割礼を強要していたクリスチャンたちは
いまだに問題を起こしパウロを煩わせていました
そして彼らはパウロがトーラーの戒めを熱心に守ることによって
自分の正しさを神に示そうとしていた頃
イエスの信徒たちを迫害していたことを思い出させていたのです
しかしパウロはイエスと同じように立場も特権も放棄し
それらを汚物のように思っていると激しい言葉で述べました
彼はイエスのように仕える者となるためにそれらを全部捨て
イエスと同じ苦しみと犠牲の愛を選んだからです
そしてイエスの愛が彼を死を通り過ぎさせて
よみがえりに到達させてくれることに希望を置いていました
パウロはイエスを信じる人の真の国籍は天にあると言いましたが
それは地上を逃れて天国へ行くことを望みなさいという意味ではありません
天国とはイエスが王としてすべ治めるすべてを超越した場所です
王である救い主はそこからこの地上に戻ってこられるのです
そして私たちはその王国の到来が正義と愛を実現し
新しい創造をもたらすことを熱心に待ち望んでいるのだと
パウロは言っているのです
それからパウロはピリピ人にイエスの物語を生きるようにと勧め
パウロと共に働いた教会の中心的な2人の女性のリーダーについて言及しました
彼女たちは反目しあっていたので
パウロはイエスのへりくだりに見習って和解し一致するように説得しました
それからピリピ人に向かって恐怖に屈せず迫害があっても
すべての思いと必要を神に打ち明け平安をいただくようにと言いました
この平安はすべての良いこと真実なこと
尊ぶべきことに思いを注ぐことによって得られるとパウロは言っています
不満を言い出したらキリがないでしょう
しかしイエスに従う者は人生のすべては贈り物でありどんな環境の中でも
そこに美しさと恵みを見出せることを知っています
それを述べてパウロの手紙の結びに入ります
まずピリピ人の贈り物に改めて感謝を述べた後で
投獄されたことや貧しさを強いられることは
自分にとって辛いことではないのだと説明します
そのおかげでどんな状況の中でも満ち足りることを学べたからです
パウロは彼を強くしてくださる方により頼んでいました
また自分の苦難はイエスの物語を生きることと捉えていました
ピリピ人への手紙を通して
私たちはパウロの思いと考えを知ることができます
パウロは自分の全人生はイエスの物語をたどることだと考えていました

この手紙を読めば彼がイエスと非常に親密で
イエスの愛と臨在を何よりも身近に感じていたことがわかります
だからこそ最悪に思える時期でも希望があり
へりくだっていることができたのです
このようにイエスを知ることは心の奥底から変えられるような出来事だと
パウロは教えてくれています
パウロが従うように勧めているイエスとはそのような方なのです
これがピリピ人への手紙です

【要約】

パウロが最初に作った東ヨーロッパの教会、ピリピの教会についての背景情報を使徒の働き 16 章から提供し、ピリピが古代マケドニア王国のローマ植民地であることを説明しました。パウロはピリピの人々にイエスの教えを伝えたが、愛国主義的な退役軍人が多く反発を受けた。パウロが書いた手紙は、教会が投獄中のパウロに支援金を送っていたことに感謝し、その手紙にはメシアの受肉、生涯、死、よみがえりを詩で再現する中心テーマがあることが強調されました。パウロは自身の投獄状況や生死観について語り、自己を捨てて他者のために生きることの価値を伝えました。また、ピリピのクリスチャンたちにイエスの物語を生きるよう勧め、エパフロディトやテモテといった信仰を持つ者の例を挙げ、イエスに従う者は地上の出来事にとらわれず、天国の到来を待望するべきだと伝えました。パウロの手紙を通じて、彼のイエスに対する親密な関係とイエスの教えに従って生きる信念が伝わり、イエスを知ることは心を変える重要な出来事であることが示されました。